

# ポラリスを仰ぐ北の大地から



## 地域における医療と交通

石狩医師会 会長 <sup>もりかわ</sup> 森川 <sup>みつる</sup> 満

石狩市内の緑苑台地区で、「自動配送ロボット実証実験中」という立て看板をあちらこちらで見かけるようになった。宅配需要の急増や配達員不足などの社会課題の解決を目的として、9月から11月まで実証実験を始めたようである。

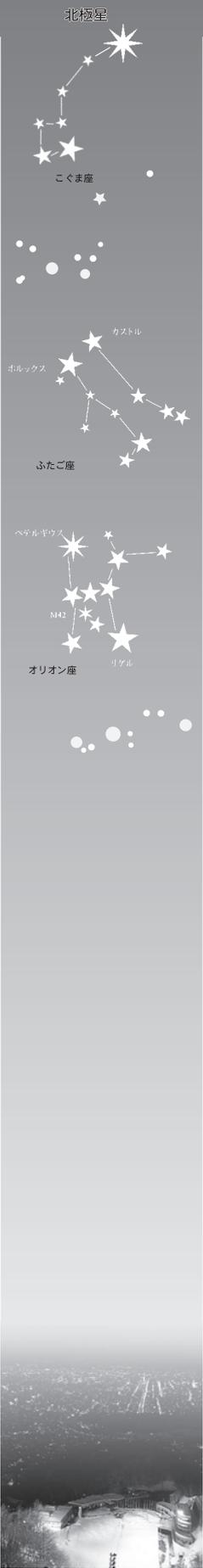
自院でも来院する患者さんのために、送迎バスを走らせている。現在、ほとんどの患者さんは自家用車で来院できるが、車を運転できない一人暮らしのおばあさんなども通院している。医療と交通は無関係の話ではないと感じてしまう。

高齢者の運転が社会問題化し、2009年から認知機能検査が始まったが、高齢ドライバーによる事故を減らすため、今年度も高齢者にかかる運転免許の更新が厳格化した。今後、運転免許を手放さなくてはならない高齢者は、さらに増加すると思う。

通院する患者さんに、今後は車の運転は控えてくださいと話した時に、「ではどう通院すれば良いのか」と質問されれば、どのように返答したら良いだろうか。医療者の答える話でないと喋ってしまえばそれまでだが、それに対する答えを自分が住んでいる自治体は用意しているのだろうか。

高齢者にとって必要な外出は、通院と買物である。自院の前の道路を挟んで向かい側には大型のスーパーがあり、診察が終わると帰りの送迎バスの出発時刻までの間に買い物を済ませてくるちゃっかりもの患者さんもある。本来、通院や買物など住民の日常生活に欠かせないものは、住んでいる自治体が考えていかななくてはならないものと感じる。

市内では、11月から来年3月まで、市街地間の移動を目的とした市内オンデマンド交通「いつモ」の実証運行が始まる。車両はワンボックスカーで事前予約が必要となるが、乗車日の7日前から乗車の直前の時間まで、予約が可能とのこと。自院の送迎バスが運行していない市内の緑苑台地区や生振地区をカバーしているようである。まずは実証実験とのことであるが、車の運転ができなくなった患者さんが、日常生活で移動手段に悩むことのない地域になればと感じたところである。



## 「世代」、それとも「時代」？

札幌医科大学医師会 会長 <sup>つちはし</sup> 土橋 <sup>かずみ</sup> 和文

「矢の如く」師走を迎えた。2020年・年頭に覚知された新型コロナウイルス感染症、以来3年弱、普通の上気道感染症に緩徐に移行しつつある。新たな「隙間風邪」程度との当初予想に反し、特異な重症肺炎と高伝播性への対応に難儀したが、検査・治療（療養）への対応も、医療機関では手慣れた感がある。しかし、「インフォデミック」による社会不安と文化の三基本「集い（祭り）・語り（会話）・食す（会食）」を忌避する「分断」からの回復は依然として見通せない。

医療者教育もコロナ禍で様変わりした。対面・生配信・チューター重視・on the jobから、非対面かつ遠隔・期間限定の録画配信・シュミレーター、on the siteに移行しつつある。一気に「時代」が変わった感がある。情報手段の発達、知識の量と奥行きを会得を可能として、意識高き学生さんは抜群に成長している（そうでない学生さんは停滞も激しいが）。一方、サークル活動・大学生活などの無駄で煩わしい活動により醸成される社会性と自己形成が怪しい。

先日、コロナ「世代」学生さんに対面授業（一部ハイブリッド）する機会を頂いた。「小生自身」不遜・不真面目な学生であり、教員から「貨物列車の駅弁売り」の誇りはよく頂いた記憶がある。「反応なきは中身がないから」と糧にしてきた。が正直、驚くことばかりだった。別次元だった。自由彷徨、勝手飲食、授業中化粧、配信重視（授業以外のコンテンツ）、みなし参加、何でもあり。大多数の真面目な学生さんには申し訳ないが教員の熱意も途切れがちとなった。これは「世代」なのか「時代」なのか？

再構築には時間がかかりそうだし、お節介だが「コロナ世代」と呼ばせないように見守りたい。